

# シュヴァイツァー博士とヘレーネ夫人（1）

翻訳・著述家（ヴィーガン）

加藤明

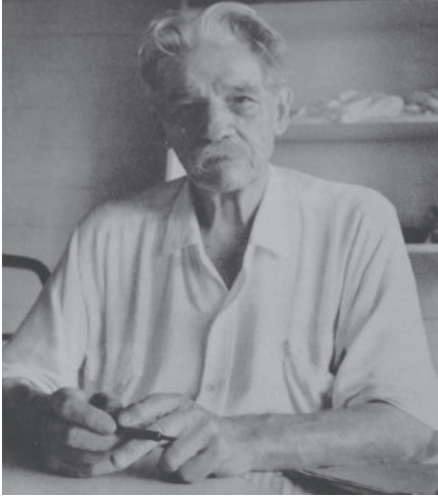
## 〈「生命への畏敬」という金字塔建設者〉

早くから生命の尊厳に目覚め、不殺生食をするようになった人として、シュヴァイツァー博士を忘れるわけには参りません。植物食をするようになった大半の偉人たち同様に、彼も、生命の一体性という究極の真理を洞察し、その悟りを身を以て示すようになった一人であるからです。

牧師・神学者・哲学者・医者・病院建設者・オルガニスト・音楽学者、また1952年度のノーベル平和賞受賞者という、多才な顔を持って活躍したシュヴァイツァーではありましたが、90歳で帰天するまで、彼の胸中に常に消えることなく灯り続けたものは、生きとし生けるものの、「神秘にして神聖なる生命」に対する畏敬の念と、一人でも一匹でも生きる苦しみから解放したい、との、慈悲の思いでありました。二度もの世界大戦が続いた上に、

原水爆による地球滅亡の危機に瀕した時代、人間性そのものと人類の未来に多くの人が絶望しつつあった時期に、シュヴァイツァーという博愛の生きた見本を見出したことで、人類の未来に対する希望と生き抜く勇気を与えられた人の、いかに多かつたことか！

彼は、アフリカの未開地に出かけたと同様、その独立不羈なる全生涯をもって、思想の領域においても、前人



未到の地に歩を進め、「生命への畏敬」哲学という、永遠に崩れることのない、万人がよって立つべき、金字塔を打ち建て、これを知らしめんと献身したのであります。医療活動はその思想の具体的な表現でありました。彼は、単に未開地の医療に貢献した医師・病院建設者として想起される以上に、「生命への畏敬」哲学という金字塔の建設者として注目され、その思想を實踐してもらおうことの方を、はるかに嬉しく感じるに違いありません。

### 〈出生からランバレネ赴任まで〉

アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer 1875-1965) は、フランス国境に近い、当時ドイツ帝領の西南に位置する、カイザースベルク (現在仏領のケゼルスベール) という町に、1875年1月14日に生まれましたが、その1カ月後、牧師だった父の事情で、そこから60 kmほど離れた、風光明媚な山間の町ギュンスバッハ (現在仏領のコルマル近郊の町) に移り、そこ

で育ちました。幼少時から生きとし生けるものに繊細な感受性を表し、自然と音楽と学問を愛する、思慮深い人物へと成長してゆきました。

幼少期からピアノやオルガンを学び、9歳の時には教会でオルガン奏者の代理を務めるほどでありましたが、1893年、18歳になると、シュトラースブルク（ストラスブール）大学に入学して神学と哲学を学び、どちらも博士号を取得した後、27歳で、シュヴァイツァーが、幼少神学教科講師となりました。シュヴァイツァーが、幼少時より最も感化をうけた人はイエスでありましたし、その後もイエスでありましたが、同じく、世界の良心と目された、当時在世中のトルストイ（1828-1910）にも深く共鳴した、と言われております。（トルストイについては、前号「サムライ・平和」第15号で紹介しておりますので、参照して下さい）トルストイ同様、シュヴァイツァーも、結局のところ、イエスの愛の福音を伝えることを使命と感じていました。言うまでもなく、イ

エスの愛とは、人のみならず、生きとし生ける一切の生命を含むものであったのであります。

1896年、21歳の時、「30歳までは説教家の職務と学問と芸術とに生きよう。それから先は、人間として直接奉仕するなんらかの道に踏み出そう。どんな奉仕の道にするかは、それまでのあいだに身の事情によつて決めよう」と決心した、と言います。社会に直接奉仕する時を30歳からとしたのは、イエスが公けに活躍されたのが30歳からであった、という故事に倣ったのだ、ということ。彼は少年時代から、自分の恵まれた境遇を意識するようになりましたが、同時に、その恩恵を社会に還元しなくてはならない、との思いも持っていました。「人生において多くの美しいものを手に入れた者は、その代わりに、やはり多くのものを提供しなければならぬ」と述べています。

1904年の秋に、フランス領コンゴ地方の窮状を知

り、アフリカ行きを志しますが、明るる年の、30歳の誕生日（1月14日）には、はつきりと、アフリカで医療奉仕する決心を固め、冬学期からシュトラーズブルク大学の医学部で学び始めました。38歳の1913年2月に医学博士号を取得し、4月、熱帯医療の従事者を募集していたパリ伝道協会の医療従事者として、前年に結婚したヘレーネ夫人を伴って、ランバレネ（現ガボン共和国領）に赴きました。

シュヴァイツァーがアフリカ行きを決心した小さからざる一つの理由に、15〜19世紀にかけて広く行われた白人による奴隷貿易に苦しんだ黒人たちに対する、白人の一人としての、贖罪意識がありました。自分のアフリカでの医療行為は決して、上からの施しというような、慈善ではない、との考えがあつたのであります。彼は書いています、「われわれがヨーロッパ以外の人びとにかよいことをしてやろうと思ふとか思わないとかいうことは、全然われわれの自由な行為ではなくて、われわれ

はそれをなさなければならぬ当然の義務を負っているのである。われわれが彼らに善を示すことは慈善ではなくて、罪の償いなのである。苦悩を広めた一人一人の人間の代わりに、助けをもたらす人間が行かなければならない。そして、われわれの全力を挙げて一切のことをなし果たしても、罪の千分の一も償ったことにはならないのである。」（『水と原生林のあいだに』）

今少し詳しく、この新しい門出について記すと、二人は、1913年、復活祭前の3月24日（聖金曜日）に、ランバレネに向かうべく、共にギュンスバッハの自宅を出発し、一旦パリに立ち寄りました。復活祭当日にはパリの聖シルピス教会でヴィドールのオルガン演奏を聴き、午後にはフランス西部の出港地ボルドーに向かいました。二人を乗せた「ヨーロッパ号」が、ランバレネに向けてボルドーを出帆したのは3月27日の午後、「仏領赤道アフリカ（現在はガボン共和国）」の港カブ・ロペスに到着したのは、4月14日のことでありました。新たな